

オドリをさがす人々 舞踊ワークショップと民俗芸能におけるサードプレイスと身体

グリゴレ・イリナ・フロレンティナ（東京大学）

本発表では、発表者が舞踊ワークショップと青森県の民俗芸能を対象として実施した参与観察とライフヒストリーから、身体が自らを探し出す過程を明らかにし、それらが非言語コミュニケーションによるサードプレイスとして日常空間に立ち上がる側面について考察する。

2013年から2015年まで参加した舞踊ワークショップにおいては、自身の身体とじかに向き合うための動作と、即興的な上演の組み立てが重視されている。毎回の練習では、一般公募のオーディションを経て選ばれた多様なプロフィールを持つ人々がグループを組んで一人の指導者によるストイックな身体観を自らの身体技法として移し込んでいく過程が存在する。しかし、このワークショップは土方翼の前衛「舞踏」を踏襲したものではない。指導者本人もこれについて公言していることもあり、このワークショップにおける舞踊を「オドリ」と呼ぶことにする。

このワークショップの指導者は、山梨県で農作業をしながら主に関東で舞踊の指導に当たっており、その求道的なライフスタイルから、関係者に畏怖の念を抱かせる舞踊家としてよく知られている。彼は映画作品への出演歴やテレビでの露出もあり、ワークショップには経験者や実践家も応募していた。しかし、定型への否定として「出来上がった」オドリに対する強い嫌悪感から、この指導者はワークショップにむしろ初心者を積極的に迎え入れてグループ作業に当たらせるという特徴を持っている。

このワークショップは埼玉県内で実施された。練習には1回あたり半日以上の時間が費やされ、その間中、参加者は与えられた課題をグループによって解決し、オドリの動作に関する練習をこなす。指導は終始極めて厳しい口調で行われるため、参加者の多くは最後には茫然自失した心理状態で帰宅することとなる。そして、その都度自身の身体について見つめなおし、また新たな課題へと進んでいくのである。

学生や主婦といった、普段は舞台芸術との関係を持たない参加者は、ワークショップの非日常的な環境の中で、対話や共同作業を繰り返しては作りなおすという模索の中で、次第にこれまでに経験していなかった身体のありようと向き合うことになる。この「オドリをさがす」体験こそが、参加者たちを厳しい指導に耐えながらも、ワークショップが舞台発表という外部に開かれた場となるまで積極的参加を継続させるきっかけとなっている。

キーワード 踊り、身体、ワークショップ、民俗芸能、サードプレイス

自らのオドリをさがすことは、ワークショップの内外において自らの生に呼応する営為につながっている。さらに、このオドリのワークショップでは、非言語コミュニケーションによるサードプレイスが場の中に発生しているといえる。オルデンバーグのサードプレイス論においては、その可能性は、たとえば政治運動がそうであるように、最終的には言語の領域によって成就する。しかし、オドリのワークショップにおいては、中心となるコミュニケーションは芸術作品の創作であり、カラダを作ることの中にある。ある身体性の分有として、オドリの場はサードプレイスとなっている。そして、このようなオドリの場が様々なジャンルで存在することは、日本におけるサードプレイスについて興味深い示唆を与えているといえる。

青森県弘前市内に伝承されている「松森町津軽獅子舞」においても、民俗芸能でありつつも、オドリの場はオドリをさがす人々による、自らの生に呼応する営為の場となっている。獅子舞はあらかじめ決められた舞踊の型やプロットに従って進行するが、やはりどのように舞うことが最もその踊り手にふさわしいのかという点は、それぞれが模索しなくてはならない。このオドリをさがす過程こそが、獅子舞を「なり受ける」、つまり伝承することに直結している。

また、獅子舞の「練成」は、松森町の公民館で隔週行われているが、メンバーの中に町内会の構成員はおらず、弘前市内の様々な地区から出向いて獅子舞の伝承に携わっている。そして400年の土地の歴史とともに獅子舞において踊りをさがす空間もまた、存在の場を身体レベルで再帰的に感受するようなサードプレイスとなっている。それぞれの踊り手はオドリをさがす過程の中で、自らの生の場を見出すことになるのだ。

さらに、松森町津軽獅子舞には、弘前城下町割を祝した縁起物として京よりもたらされたという歴史的経緯のためか、地域の民間信仰に組み込まれた活動は神社への奉納の中にさえ見ることが難しい。しかし、踊り手の主体は「獅子になる」というアニミズム的感覚がオドリをさがす営為の中に存在している。

これら二つの事例が示唆するのは、身体表現のジャンルに関わらず、オドリをさがすという行為が場を生み出し、同時にその生み出された場によって非言語コミュニケーションによるサードプレイスが姿を現すということである。いいかえると、オドリをさがすことは、自らの生をサードプレイスの場の共創につなげていく営為なのだといえる。